

原因不明の顔面神経痛 症状抑える仕組み発見

徳大グループ 治療法確立に期待



松香芳三教授

徳島大大学院医歯薬学研究部の松香芳三教授(55)らの研究グループが、原因の分からない顔の痛みに対し、タロキニド「サイトカイン」の働きを抑制すると軽減効果があることを発見した。

「三叉神経痛」などと呼ばれる顔面痛の発生メカニズムはよく分かっていない。研究グループの実験では、ラットの目の奥に痛みを与えて三叉神経痛と同じ症状をつくり、神経細胞の周りの「グリア細胞」の中にあるサイトカインの変化を観察した。

すると、痛みを引き起こす炎症性のサイトカインが増え、グリア細胞から離れていくのを確認。炎症性のサイトカインを抑える抗炎症性のサイトカインや抗体をラットに投与したところ、痛みは軽減された。実験の結果、サイトカインがグリア細胞から離れることによって痛みを伝えることが判明した。

松香教授は「顔面痛でつらい思いをしている患者の治療に役立つと期待している。効率的に痛みを抑えられる方法が他にないか研究したい」としている。

同様の研究をしている日本大歯学部部の岩田幸一教授(疼痛学)は「研究成果を基に効果的な薬が開発されれば、顔面の慢性痛に悩む患者の治療につながる」としている。

研究成果は2月にスイスのオンライン科学誌、3月にオランダのオンライン科学誌に掲載された。

(岸和弘)

【紙面編集】齋藤邦彦